東洋の国士・杉山茂丸

「東洋の国士・杉山茂丸」と刻まれた小さな石碑が長崎街道の宿場町山家（筑紫野市山家）の一隅に建立されているのに気付く人は少ないでしょう。“東洋の国士”とは何者か？「身をかえりみず国家のことを考える東洋人」と解釈できますが、「憂国の士」だったのでしょう。

杉山茂丸という人物にスポットを当てると、日清・日露戦争から韓国併合などで政界の黒幕として縦横無尽に活躍した姿が浮かび上がってきます。しかも、その長男泰道が小説家・夢野久作というのも興味を呼びます。

山家とのかかわりは、茂丸（幼名平四郎）の父親である福岡藩士で儒学者の杉山三郎平（後の灌園）が明治維新後、この宿場町に移り住んだことから始まります。この父子は隣接した旧夜須郡二村で「敬止義塾」を開き、近くの子弟を育てました。茂丸は秋月の変、佐賀の変、西南の役と続く旧士族たちの反政府運動に大きな影響を受け、先天的な知力と豪気で決起したとみられています。

▲杉山茂丸の記念碑

▲敬止義塾址の碑

16歳の茂丸が頑固な三郎平を説き伏せて隠居させ、家督を相続しました。その頃の福岡では、そんな気風の青年が頭山満の率いる玄洋社と交わりを深めるのは当然の流れでした。各地の炭坑採掘権をめぐる騒乱、選挙大干渉に反抗して壮士団の先陣に立って戦っています。

また、政財界にはびこる西洋崇拝熱に危機感を持ち、上海、香港の植民地化を許さず、玄洋社も飛び出して単身、大陸の政治工作に

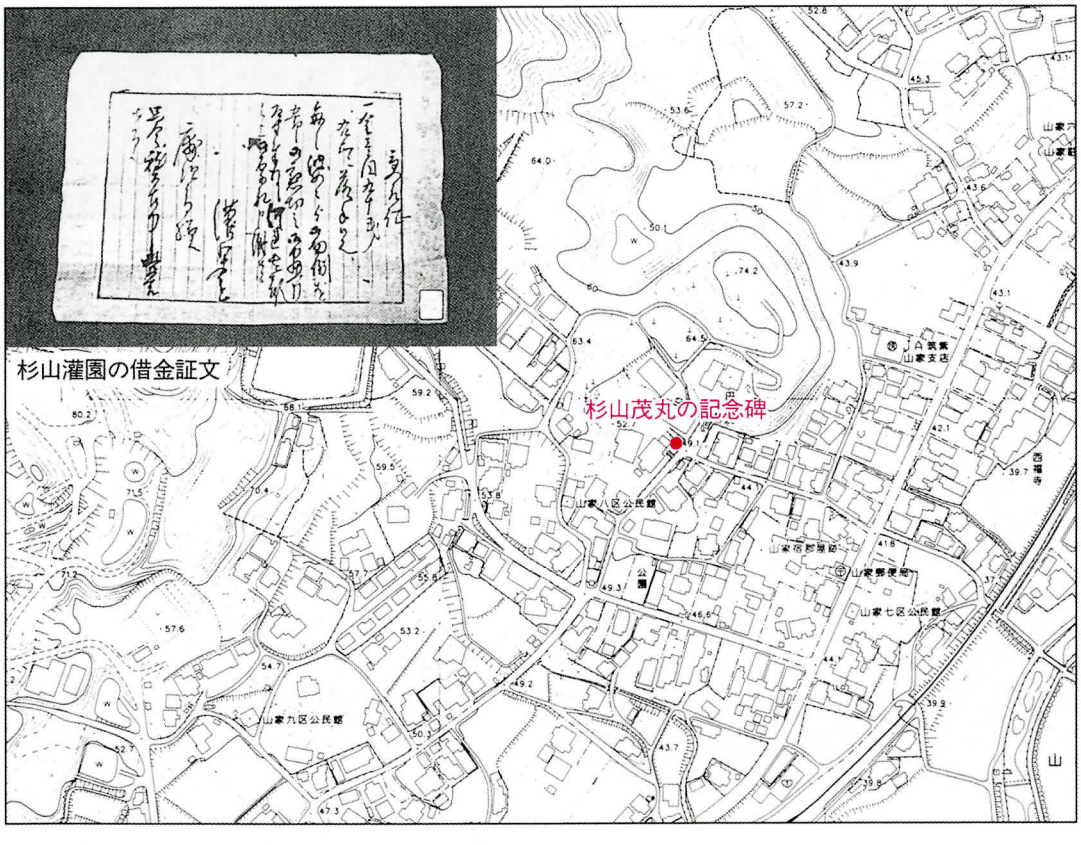
奔走しました。日清戦争の「遼東半島」問題、日露戦争の「南満州鉄道」問題には影武者・茂丸の姿があったといわれています。この間、二日市に茂丸父子が住んだ記録として、地元大賀家からの借金がうかがわれる手紙があります。

茂丸は、地元福岡でも九州鉄道の敷設（現ＪＲ）、博多築港の開設のほか、関門海底トンネルの建設にも大きな足跡を残しました。結局、同トンネルの完成(昭和17年)を待たずに、10年７月19日、死去しました。72歳でした。

父杉山茂丸について、夢野久作は著書『近世快人伝』で次のように書いています。

「彼は現代に於ける最高度の宣伝上手である。彼に説明させると日清、日露の両戦争の裏面が手に取るごとよくわかると同時に、その両戦役が彼の指先の加減一つで火蓋を切られた事が肯定されて来る。世人はだから彼を綽名して法螺丸という…その法螺は大隈重信の法螺とは段違いの処がある。少なくとも大隈重信の法螺は、百科辞典の範疇を出ないのに対して、法螺丸の法螺はたしかに百科辞典を超越した一種の洒落気と魔力とを兼ね備えている…」(原文)

茂丸の数多い道楽の中で有名なのが刀剣収集です。頭山満にお礼として銘刀(時価千円)を贈った後、「あの刀が気に入ったか」と茂丸が聞いたのに対し、頭山が「質屋に持っていったら30円貸したぞ」と答えた。これには豪気の茂丸も舌を巻いたという逸話は、いかにも巨頭同志の横顔を描き出しているといえるでしょう。（村里徳夫）



2000. 3. 31. 発行
2015. 2. 28. 第2刷発行